

## 障害も個性の一部

岐阜市立岩野田中学校 三年 宇留野 由奈

私は生まれつき、斜視があります。今でこそ、二度の手術を経て、症状も和らいできましたが、完治する可能性は低い、そんな病気です。

幼稚園に通っていた頃、私は斜視を少しでも良くするために、アイパッチをつけていました。アイパッチとは、片方の目を隠すための物で、それをつけることによって、もう片方の目を使う訓練をしていました。眼帯のような物なので、よく友達から、

「ゆなちゃん目が片方ない！変だよ！」

「わー、障害者じゃん！」

と言われてきました。まだ子供だし、悪気はなかったのだと思います。だけど私はそのように言われることが嫌で、アイパッチをつけることが怖くなっていました。なんで、なんで私は普通じゃないの？なんで他の子とは違うの？そんな疑問を、お母さんにぶつけました。

「あなたは生まれた時から、斜視という病気なんだよ。目が寄っちゃう病気。日本人の約3%くらいは斜視だけど、その中でもあなたは、症状が重い斜視なの。普通に生んであげられなくてごめんね。他の子と違ってごめんね。」

正直その時の私は、お母さんの話がよく分かりませんでした。ただ私はみんなと違う、普通ではないんだ。障害者っていうくりなんだ。嫌だな。そう感じていました。

その事もあってか、私は「障害者」という言葉に人一倍敏感になっていると思います。障害者だからみんなと違う。障害者だから出来ない。そんな言葉を耳にする時、私はとてもやるせない気持ちになります。

そんな私に、ある出来事が訪れました。私は今、整形外科のリハビリに通っています。部活動で膝を故障してしまったからです。私が通っているリハビリには、年少者からご年配の方、交通事故、部活動での怪我など、さまざまな人が、さまざまな理由で訪れます。ある日、私はリハビリ室で、足の不自由な方を見かけました。歩行アシスト、という機械を使って、歩く練習をしてみえました。その歩けるようにひたむきに努力されている姿をみて、私は心を打たれました。その想いを、私のリハビリを担当してくださっている理学療法士の方に伝えると、こんな言葉がかえってきました。

「そうだね。本当に努力してみえるよね。あの方は生まれつき足が不自由で、辛い思いも沢山されてきたみたい。だけど今は、自分が出来ることに一生懸命取り組んでみえるよ。あの方をみると、まさに障害も個性の一部って感じがするよね。」

「障害も個性の一部」。私は、本当に素晴らしい言葉に出会ったと思います。その日の夜、私は沢山の事を考えました。普通とはなんだろう？障害があったら何も出来ないのかな？障害がある、というだけで他の人とは違うの？沢山、たくさん考えました。やっぱり私は、皆同じ人間だと思います。「普通」が全員同じとは限りません。障害がない人にとっては「足が自由に動く」ことが普通であっても、障害がある人にとっては「足が不自由」であることが普通なんです。確かに足が不自由な人は、私達と同じようには歩けないかもしれませんが、歩けるように努力したり、車椅子を使う、など、自分なりの歩く方法を見つけたりしています。オリンピック・パラリンピックを思い出してみてください。陸上競技

では、オリンピックでは、選手が走ります。では、パラリンピックではどうですか？足が不自由な方は義足を使って、目が不自由な方はガイドランナーとともに、走っています。走っているんです。障害があるから出来ない、そんなことはないんです。

障害も個性の一部。これが社会の常識となり、障害がある人もない人も、一人の人間として尊重され、好きな事に好きなだけ取り組める、そんな社会を、私は望んでいます。

お母さん、確かに私は斜視という病気だよ。だけどね、それも私の個性の一部だから。お母さんに産んでもらえて良かった。みんなと違って出来ること、沢山あるから。私は今、これを証明するために、沢山の事に挑戦しています。水泳や陸上を頑張っています。斜視の人が比較的苦手、とされる、球技系も頑張っています。確かに難しいけれど、その分練習すれば、必ず上達するはずだから。